



Move Mountains

○第2回 句会～夏の陣～

今号は、縦書きでお送りします。理由は後ほど。

俳句は二回目になります。前回の様子はこちら

(<https://blog.seto-solan.ed.jp/?p=9310>)

前回の指導の要点は以下の二つでした。

- 一・直接書かない
- 二・意外な言葉の組み合わせを作ってみる

今回は、それに加えて

三・順番

外にも出よ触るるばかりに春の月 中村汀女

「少しずつ暖かくなり始めた春の頃、外に出ると触れられそうなくらい低い所に月がある」といった意味になります。

さて、なぜ縦書きなのか。先ほどの俳句の一番下に来ている言葉は何でしょうか。月ですね。低い所に月があることを表記でも表現しているわけです。

では、次の俳句はどちらの順番が正しいでしょうか。

1. 落ちにけり赤い椿白い椿と
2. 赤い椿白い椿と落ちにけり

河東碧梧桐

正解は、2です。こちらも、上から下に椿の花び

らが落ちるので、句の下に「落ちる」がくるのですね。

このように、俳句の言葉の順番はとても重要です。

四・五感を入れる

柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺 正岡子規

誰もが知る名句ですが、なぜ名句になり得るのか。一つに、五感が含まれているからだと言われています。

どんな音が聞こえますか。どんな味がしますか。どんな味ですか。どんな匂いがしますか。何が見えますか。

これらを全て考えることができます。頭ばかりでなく、無意識のうちに五感をフル活用して読んでいます。

たった十七音ですが、秘められた奥深い世界が広がっていますね。

さて、今回も句会の形式で、匿名発表、投票を行いました。傑作ぞろいです。

どんぐり見つけポッケに入れてまた来年

ポケットから出てくるとどんぐりが目に浮かびます。きつと洗濯もされてるでしょうね。

木が育ち葉が咲き散る散り咲きる

後半、畳み掛けるように順番を変えて繰り返しているのが非常におもしろい表現です。咲いて散ることを繰り返す、命の循環を感じます。

秋高し霧の中でも月光る

授業で習ったことを活用し「秋高し」を頭に持ってくるのがさすがですね。

虫鳴れば蛇穴に入り騒音だ

「蛇穴に入る」が秋の季語ということを知りました。季語の世界だけでも奥深いですね。虫が鳴く頃には、蛇が冬眠の準備をする、と読めば秋の情感も湧いてくるでしょうか。

教室では、こんなことも伝えていきます。

千年以上前から親しまれてきた句会。匿名であることが肝です。例えば、この授業はフォームを使ってデジタル回収していますが、昔はそんなものないわけです。書くしかない訳ですが、筆跡で分かってしまうこともあります。そこで、利き手でない方で書くといった工夫をしていたこともあるそうです。

なぜ季語があるのか。それは、限られた文字数の中に、最大限に情報を詰め込むためです。「季語の○○は、あの有名な俳人が△△の中で使っているから、こういった情景も含む」みたいな、過去の事例から意味が広がったり、逆に限定されたりということがあった訳です。だから、プロは自分が作るだけでなく、過去の作品も十分に勉強する必要があります。

とはいえ、今からそこまでの勉強もできませんから、とにかく言葉遊びを楽しみましょう。

次からは、短歌にしようと思っていますが、その理由はまた今度。

☆お便りフォームはこちら☆

<https://forms.gle/ndGkDHTYcmB1bWyU9>

